

シンポジウム

施設ホスピス、在宅ホスピスの経験から

関本クリニック 関本雅子

7年間の施設ホスピス医、1年間の在宅ホスピス医としての立場から、ターミナルケアにおける患者家族のケアについてお話いたします。

全国ホスピス・緩和ケア病棟連絡協議会での遺族アンケートの結果、ホスピス病棟で患者家族が医療者に対してどのような思いを抱いてすごしていたのかがくみ取れます。ホスピス病棟のスタッフは、患者と家族に対して常に「質問はありませんか?」「注文はありませんか?」と問いかけるよう心がけていますが、患者家族はスタッフには問いかけないまま、様々な思いを持っているようです。患者の死後1年を経た、遺族会の時に、初めて「あの時、外泊で自宅に連れて帰ったのは本人を疲れさせただけではないかとずっと気になっていました。」というような話しが出ることもあります。

在宅ホスピスの長所として、病棟と比較して患者家族の本音が出やすいのではないかと感じています。しかし、在宅の短所として、患者及び家族に孤立感が強い、ということがあげられます。それだけに患者の病状説明をできるだけ詳しく行い、患者も家族も別れの時を見据えながら、時間を大切に使えるよう援助が必要だと思えます。

在宅ホスピスでの鎮静、看取りの説明の内容及び時期に関しても触れさせていただきます。また、今後の課題として、ターミナル期における患者家族のレスパイトケアのためのホスピス病棟でのベッド確保、あるいはデイケアセンター構想について希望を述べさせていただきます。